

駐妻のヒューストン日記

第209回 早川亜由美 さん



みなさんはパッチワークキルトをご存じですか？パッチワークとは、小さな布を文字通りpatch(継ぎ合わせ)する手芸の技法です。継ぎ合わせて作ったキルトトップに中綿(キルト芯)と裏布を合わせ、縫うことで厚みのある生地が出来ます。これがキルトです。私は10代の頃から本を参考に見よう見まねで小物を作り始め、その後もハワイアンの子供キルトを友達にプレゼントしたり、長男の出産前にマザーバッグを作ったり、折に触れて作品を作っていました。

キルトが本場であるアメリカに引っ越し、キルトに興味はあったもののその頃は子供たちが6歳と4歳でその余裕がありませんでした。特に下の子は午前と午後別のschoolに通っており、私は9時半にpreschoolへ送り11時半に迎え、公園でお弁当を食べさせ12時半に次のPreKにドロップオフ、3時にピックアップという送り迎えの日々を送っていました。なので日本から持ってきていた材料や道具は箱から出されることなく半年が過ぎていました。

ちょうどそのころケイティISD主催のadult educationでキルトの講座があることを知りました。が、お昼に送り迎えがあったので10時から2時の講座の受講を半ば諦めていました。すると、同じようにダブルスクールをしていたお友達が送り迎えを買って出してくれ、その講座を受講することができました。そこで私のキルト人生が変わりました。

日本のキルトは、ピーシングもキルティングも手縫いが主流です。厚紙で型紙をつくり、布に印をつけ、縫い代をとってカット、その後待ち針で両端をあわせてから手縫いでピースを縫い合わせます。キルティングもフープという刺繍枠の大きいものをつけ、一針一針手で縫います。なので作品によっては完成まで数年かかるようなものもあります。それとは対称的に、アメ

リカのキルトは大胆です。型紙は作らず、印付けもしない、布幅のまま大きな定規を使い縫い代込みの寸法を一気にカットします。ピーシングもキルティングもミシンを使ってあつという間にベッドカバーのような大きさのキルトが出来上がります。私はこの手法を知った時、目から鱗が落ちました。と共に大胆で合理的なやり方がとてもアメリカらしいとも感じました。

アメリカの色鮮やかでモダンなキルトに魅了され、私はまたキルトに夢中になりました。そしてここは夢中になるのにいい環境なのです。日本にはないキルト専門のショップがヒューストン近郊だけでも数店舗もあります。そして、世界的なイベントであるインターナショナルキルトフェスティバルもヒューストンで毎年開催されています。

私は、作ったキルトをインスタに投稿するようになりました。するとそこでまた世界が広がり、色んな国のキルターさんと出会うことができました。Quilt Alongという同じデザインをみんなと一緒に縫いましょうという企画に参加すると、他の人の配色や布選びを知ることができ、とても楽しく勉強になりました。その中でとても嬉しい事もありました。私のキルトを雑誌に載せたいと、キルト雑誌のディレクターの方がDMを下されたのです。雑誌が刊行されるまで半信半疑でしたが、私のキルトと拙い文章がオーストラリアの雑誌に載ったときは、本当に感動しました。

それ以外にも教会のキルティングビーに参加して作ったキルトを囲んでお祈りしたり、ヒューストンではキルトを通してたくさんの人に出会い、たくさんの経験をする事ができました。その全てが宝物です。私はこの3月で約6年の駐在生活を終え帰国しますが、これからも私らしいキルトを作り続けたいと思います。



ピーカンキッズ ～読み聞かせの会～

我が家の読み聞かせ事情 読み聞かせの会で読む本は、事前にメンバーが集まり選定します。選定基準というものは明確にはなく、みなそれぞれ自分の好みで選ぶのですが、文章が美しい本、絵が美しい本、家で読む時には選ばない対象年齢以上の少し長い本などを選ぶように気をつけています。ほかに、昔から人気がある本、外国の絵本、「きんぎょがにげた」のような、聞いているお子さんも参加できる遊びの要素がある絵本など、毎回組み合わせを考えて選んでいます。長めの本でも、お母さんのお膝の上でみんなが一緒にと意外と集中して聞いてくれるので、読んでいる我々もとても嬉しくなります。

読み聞かせのメンバーをしていると、さぞ家でもまじめに良質な本を読み聞かせているのだろうと思われるかもしれませんが、我が家の場合、全くそんなことはありません。アニメ絵本、漫画、ゲームブックなど、何でも図書館で借ります。どんな本でも、本が家にあるだけで第一段階クリアだと思っているからです。とにかく本が身近にあれば開いてしまうはず。図書館に行って本を選ぶワクワクした気持ち。初めての本も、お気に入りの何度も借りた本もおうちに持って帰る。それだけで嬉しい気持ちになってくれれば本好き街道まっしぐらだと勝手に信じて疑いません。

恥ずかしながら、私はあまり子どもの頃に絵本を読んだ記憶がありません。新興住宅地で近所に図書館がまだなかったので、絵本といえば本好きの祖母が時折送ってくれるものと、幼稚園や小学校で読み聞かせてもらうものだけでした。大きくなってから友人たちと「ぐりとぐら」の思い出話ができず寂しい思いをしたことがありました。ですので、子どもができて初めて買った本は「ぐりとぐら」。大人になっても絵本のなんと面白いこと。子どもの時に読んでいたらどれほど楽しめたんだろうと思いました。学生時代や大人になってからはわりと読書が好きでたくさん読んだのですが、いくら大人向けの本を読んでも、絵本を読まなかったその部分はなかなか埋められないとその時に思いました。子どもという感性豊かな時代の絵本を通じた疑似体験や感動は、大人になってからは得難い。そういう思いがあり、自分の子どもにはたくさん絵本に触れて欲しくて読み聞かせをしてきました。

我が家でも子ども全員が夢中で絵本を読んでいたかというところ、そうでもありません。本が大好きで、一日中同じ絵本を何回も何回も読んでいた子もいました。自然と自分で本を読むようになってくれ、しめしめと思ったものです。

日本語が読めないわけではないのに、絵本は開けるけれど字は読まない子もいました。一生懸命読み聞かせをしてきたのに、幼稚園の頃から絵本をばらばらとめくって眺めるだけ。絵本よりドラゴンボールなどの漫画ばかり開いていました。親としては「ああ、よその子はもうとくに自分で読んでいるのに。」とやきもきし、本好きになってくれることを半信半疑していました。けれど、本を開く習慣さえできていればいつか読んでくれると信じて、気長に待つことにしました。するとある日突然、そんな日が来ました。きっかけが何だったのかはわかりませんが、ただその子のタイミングだったのだと思います。本を手にする習慣はあったので、時間があつたら常に読書をするようになりました。相変わらず漫画もたっぷり読みますが、こちらをやっと、読書好きになってくれたようです。

実は我が家で絵本の読み聞かせをたくさんしてきた理由はもうひとつあります。海外で子育てするにあたり、日本語を100%話せるようになつて欲しいという思いがあったからです。学生時代に日本語教員養成課程(日本語が母語でない人に日本語を教える教員になるのための授業)で聞いた話が印象に残っています。人は言葉を使って思考する。その言葉が足りなければ、概念を作り上げることができず、思考も深くできず、物事を伝えることも難しくなるというものです。我が家の場合は日本語をしっかりと身につけて欲しいと思い、家の中では100%日本語を使ってきました。家庭内での限られた日本語に加え、絵本や本の世界で使われる無限の日本語にはずいぶん助けられている気がします。

理想は親も一緒に楽しむことですが、正直なところ忙しい時に絵本を読んで、と言われると後回しにしてしまいます。何度も何度も読み聞かせた同じ本に飽きてしまうことも多々あります。ですが、絵本を読み聞かせてあげられるのは子育てのなかでもほんの数分。本を読むことで言葉を育て、絵本の世界を旅し、人としての心の経験が豊かになってくれればと思い、これからもあと少しがんばって読み聞かせをしていきたいと思えます。そして子どもが大きくなって、お膝に座って本を読んでもらうって幸せな時間や気持ちを思い出してくれると良いなと思います。今気がつきましたが、読み聞かせはもしかすると親が思い出を作ってもらっているのかもしれない。(下保木真澄)

ピーカンキッズ今後の開催予定 *スタッフは随時募集中です。

あそぼーかい pecan.asobo@gmail.com

4月8日(金) 詳細は[ヒューストン日本商工会Facebookページ](#)、[ヒューストンなび](#)にて確認してください。やむをえず中止や予定変更になる場合も同様です。

読み聞かせの会 houstonyomikikase@gmail.com

開催日は未定です。[HP](#)にてご確認ください。